

特集にあたって 八巻 秀（駒澤大学／やまき心理臨床オフィス）

今回の特集は、現在あらためて注目されている「アドラー心理学」と、その考え方に基づいた学校現場における実践について取り上げる。

アドラー心理学（正式名称は「個人心理学 Individual Psychology」）とは、オーストリアの精神科医アルフレッド・アドラー（1870年～1937年）によって創始された「人間知（＝人間に関する具体的・実践的な知恵）」についての体系的な心理学の技法・理論・思想の総称である。

アドラー心理学は、フロイトの精神分析学やユングの分析心理学とともに、現代の臨床心理学の基礎を築いた3大理論とも言われてきている。しかし、アドラー心理学が日本に紹介されてから、すでに30年以上が経っているという歴史があるにもかかわらず、他の2つの心理学に比べて、これまで日本での認知度は低く、あまり注目されてきたとは言えない。実際、大学でもアドラー心理学を専門とする教員は数えるほどである。その一方で、細々とではあるが、産業・医療・福祉の領域など、様々な現場でアドラー心理学による実践が行われてきており、特に子育てや学校教育の分野では多くの実践報告がなされてきている。ただ、学校臨床あるいはスクールカウンセリング活動という分野では、残念ながら大きく取り上げられることはなかったというのが、これまでのアドラー心理学の日本における現状であった。

しかし、2013年末に発売された『嫌われる勇氣（ダイヤモンド社）』という本が、すでに85万部を超えるベストセラーとなり、まずはビジネスの世界から始まって、アドラー心理学の考え方が一般の方々にも注目されるようになった。このことをきっかけとして、アドラー心理学の関連本が次々と出版される「アドラー心理学ブーム」が起り、多くの人たちにアドラー心理学の考え方が浸透するようになったのである。

ちなみにこの雑誌「子どもの心と学校臨床」において、アドラー心理学のようないわゆる1つの学派の心理学とその理論に伴う実践について特集するのは初めてである。「学派」という言葉が示すような、先達が唱えた理論が先行する論文は、学校現場で日々格闘するスクールカウンセラーや教員のみなさんにとって、読んでも難解なことが多く、書かれていることが腑に落ち現場でも役立つかどうかという点では、何かしっくりこない・使えないものがあるのかもしれない。子ども、家族、学校のための実践に役立つ雑誌を目指している本誌としては、これまでは、実際の現場からニーズに応えるようなトピックスをとりあげており、その点ではまさに現場で格闘されている方のための、現場発の学校臨床雑誌として、とても意義あるものと思われる。

しかし、今回あえてそのような現場からの発想を大切にこの雑誌で、アドラーという先達が唱えた心理学をとりあげてもらえたのは、他にもないアドラー心理学が提供する考え方やその技法が、実際のところ学校現場で役立っているからだけではなく、あらためて多くの学校臨床関係者にとって、再認識してほしいトピックスが、アドラー心理学の中にはまだあるからということも大きな理由である。精神医学者のアンリ・エレンベルガーが、著書『無意識の発見 下（弘文堂）』の中で、「彼（アドラー）の学説は、『共同採石場』みたいなもので、だれもがみな平気でそこからなにかを掘り出してくることができる。

（p. 271）」と述べているように、アドラー心理学は、現場で使える原石が眠っている場として、臨床心理学における共同採石場として、あらためて見つめ直す必要がある「古くて新しい心理学」なのである。

今回の特集の執筆者は、すべて何らかの形で学校臨床に携わり、その中でアドラー心理学の技法・理論・思想を意識しながら、現場で実践・研究に取り組んでおられるスクールカウンセラーや教師、研究者にお願いしている。読者の皆さんは、この特集を読んでいただき、現在のアドラー心理学の技法・理論・思想の学校現場での活用的一端を垣間見ながら、可能な範囲で自らの実践に使っていただければ、「使用の心理学」と呼ばれるアドラー心理学の本領発揮となるはずである。